

Title	ユダヤ人の排斥とカフカ
Sub Title	Der Antisemitismus und Kafka
Author	黒岩, 純一 (Kuroiwa, Junichi)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1972
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.31, (1972. 2) ,p.82- 104
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00310001-0082">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00310001-0082</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# 「ユダヤ人の排斥」とカフカ

黒 岩 純 一

## 序

カフカほど日記や手紙の中にユダヤ人の問題を書き続けた作家もめずらしい。それはカフカがしばしば、「諸民族国家」とよばれるハプスブルク君主国に生れ、世紀末のヨーロッパにあつていよいよ高まる反ユダヤ主義的環境の中に育つたからだと言える。

ハプスブルク君主国内の諸民族は平等ではなく、階層化されており、並置されるのではなく、互に積み重ねられていた。民族問題は単に政治問題であるばかりでなく、社会問題でもあつた。そしてユダヤ人はつねに被抑圧民族であつた。

このような状況の下に生れたカフカの文学には多くのユダヤ的要素がみとめられるが、カフカの「不安」の概念ともある面で密接に關係しているこのユダヤ人としての人種問題は、カフカ文学を理解するうえで極めて重要である。カフカの *『Judentum』* に関する関係は専らユダヤ人としての同胞意識、及び祖先の残した文化遺産にたいする憧憬と共感から発していると思われる。そしてその強い同胞意識は過去から現在にいたる永年の迫害の歴史と無縁ではない。

ユダヤ人カフカを識るために、本稿では、まず簡単にドイツを中心とするヨーロッパのユダヤ人の迫害の歴史からはじめて、次にカフカの生れたブラハのユダヤ人問題の特殊性を述べたあと、作品にあらわれた *『Judentum』* について触れてみたい。

離散したユダヤ人のヨーロッパにおける進出基地はスペインを除けばドイツであった。七〇年のイェルサレムの寺院破壊以来、ユダヤ人はローマ帝国の支配下に生きたが、昔からユダヤ人が奴隸として小アジアやギリシヤ地方に運ばれていったことは、よく知られている。小アジアは北において黒海に面しており、西からはドナウ河がこれに注いでいる。この地方のユダヤ人が自由民となった後も時に起る周囲の圧迫や迫害を避けて、移住を重ねていったであろうことは、自然な想像である。おそくとも三世紀には彼らはドイツに達していた。

最も平易な経路としてドナウ河を逆行して、ルーマニアとブルガリアとの間を通つて、チエコスロバキアの北辺を西北に向つて遡行すると南ドイツに達する。しかし大部分のユダヤ人はライン河に行き当つて、これを北上しようである。彼らは八〇〇年から九〇〇年にかけてスペイン、フランスなどからドイツ西部、ベーメンまで居住するにいたる。そしてたちまち、メッツ、トリール、ケルン、ヴォルムス、マインツ、レーゲンスブルク、プラハ、更にザールレ、エルベ河畔に達し、十一世紀には重要都市のほとんどにユダヤ人の共同体がみられた。

ドイツでは國家成立から一〇九六年の第一回十字軍の時代まで、ユダヤ人の生活は後の時代に比較し、ずっと幸福であった。第一回十字軍がドイツへ行き、就中、西方で放火、掠奪をもつて、ユダヤ人共同体を滅ぼしたのだが、その時の軍勢はフランスからきていた。この時期にハインリッヒ四世はユダヤ人保護令を發したが、實際的效果はなかつた。

その後、キリスト教國家の中で、ユダヤ人の生活を可能にするには種々問題も多く、多くの國家は困り果てた末に、ユダヤ人追放をもつて問題の解決を計らうとした。

例えばイギリスでは一二九〇年、ついでフランスでは一三〇六年、そして一時的には許可したもの、一三九〇年には再び追放を行

なう。スペインでは一四九二年、ポルトガルでは一四九七年にユダヤ人追放を決定する。

だがドイツ、イタリアでは全面的追放にはいたらなかった。ドイツでは諸々の問題をかかえながらも、多くの君主は彼らに従順なユダヤ人を完全に見棄てることはなかった。支配者は彼らの収入が危機にさらされるような事態が起こったときは、いつでもユダヤ人を絞り上げることによって埋め合わせをしたから、彼らにとってユダヤ人はときに必要な存在であった。ドイツにユダヤ人の絶えざる歴史が存在するのはそのためである。しかしその歴史はつねに抑圧の歴史であった。第一回十字軍から宗教改革の過ぎてしまふ時期まで、ドイツのユダヤ人の状況は絶えず悪化して行く。ユダヤ人になりたいする暴行、殺戮の表面上の理由は宗教的フアナティスムである。しかし実際は、掠奪欲 (Raublust) や殺害欲 (Mordlust) などの感情を交えた、たいていは、プリミティヴな経済的理由によるものであった。

ユダヤ人の経済的影響力はキリスト教会が育てたと言える。カトリックでは貧者と弱者の保護という立場からつねに「利子の禁止」を問題としてきた。この問題は利子の非生産性を述べたアリストテレスにさかのぼるが、ドイツではカール大帝以後フリードリヒ・ヴィルヘルム一世、二世と利子禁止の措置はきびしく引き継がれた。しかし始まり行く貨幣経済にあつて、利子業は不可欠の職業となった。しかし一方で、これを汚ない職業だと考える矛盾が中世社会に復讐をくわだてることになる。一二一五年、キリスト教徒は利子業に従事することを禁じられる。その結果、この職業はキリスト教徒の掟に束縛されないユダヤ人に任せられることになった。そのうえユダヤ人の商行為は恣意に委ねられていたため、借り手は最初から法外な利子に悩まされた。支配者は定収入が減ると、その分をユダヤ人から取りあげることによって埋め合わせをつけた。ユダヤ人は搾取された分を逆にキリスト教徒から搾取した。この悪循環はやがて全階級がユダヤ人に借りをつくるような結果を招いた。こうした貸し手と借り手の緊張関係は当然ながらユダヤ人排斥となつてあらわれる。

土地所有、職業選択の自由を奪われたユダヤ人は古着商、行商人、金貸しなどの都会的な職業に従事するよう追いつめられていった。殊に宿命的とも言えるのはユダヤ人に「高利貸し」というレッテルがはられたことである。

フランクフルトの Ghetto は一四六二年にはじまる。ユダヤ人とキリスト教徒の個人的な交際から、一緒の食事、祭り、入浴、宗教上の対話にいたるまで禁止される。ルターはユダヤ人にたいして好意的であるが、信仰告白をしない場合は敵しい態度を示した。こういグレートもフランクフルトの小路のユダヤ人を描くとき、好意的とは言えなかった。しかし一方で、レッシングとせむしのユダヤ人モーゼス・メンデルスゾーンとの友情は一七八〇年頃には、すでに二六年も続いていた。レッシングは『賢者ナータン』の中にメンデルスゾーンの面影を伝えている。メンデルスゾーンは決して独創的な思想家ではなかったが、人間的な偉大さで人々を魅きつけた。彼の登場がユダヤ人の解放を促進させた意義は大きい。

しかしザクセン地方では一七四六年に施行された「ユダヤ人法」(Judenordnung) によって、ユダヤ人の限られた数だけがドレスデン、ライプツィヒに限って生活することが許された。だがそのためには家族一人一人に五ターレルから七〇ターレルの保護税を支払わねばならなかった。結婚許可を受けるには四〇ターレルを必要とした。職業は両替業と古着商だけが認められていたにすぎない。

同じ頃フランクフルトには五〇〇家族のユダヤ人が生活していたが、毎年一二組の結婚が許されるだけであった。この都市では一八世紀の末期まで、キリスト教徒が路上でユダヤ人に向かって「Mach Mores, Jud!」(お行儀よくしろよ!)と挨拶したときには帽子をとって、それに答えることがユダヤ人に強制 (Grubzwang) されていた。

しかし一八世紀にはそろそろ改革の動きが見えはじめていた。自然法の教え、人類の進歩と教育にたいするオプティミスティックな信仰、重商主義から資本主義への発展、たえず分割、組織される国家から立憲国への発展、並びに一八世紀のヒューマニスティックな考え方の発展は各国に影響を与えて、先進的な国々の状況に適合させようとする態度を生んだ。だが解放の歩みは遅かった。カフカの身近なウィーン、ペーメン、メーレンでは一八〇〇年をすぎても居住を許される家族数は僅かであったし、勿論、保護税を支払わねばならなかった。ペーメン、メーレンでは長男の結婚しか認められなかった。

ライン左岸からリュベックまでナポレオンによってフランスに編入された地域では一七九一年以降、フランス流の解放が行われた

が、これも上からの解放であつて、ライン同盟諸國がナポレオン流の改革に熱心であつたわけではない。

ドイツでは一八六九年になつてようやく『Verfassung des Norddeutschen Bundes』(北ドイツ連邦憲法)の決めたユダヤ人の市民的解放が全ドイツに波及する。しかしすでにこの時期になると、解放は世界の大勢であつた。アメリカでは独立以来、ユダヤ人の平等権が認められていたし、フランスでは一七九一年、ついでオランダ、ベルギー、デンマーク、スウェーデン、イタリー、そしてオーストリアハンガリー二重帝國でも一八六七年には平等権を認めていた。

だが解放実現の前提条件はそれ自身の中に大きな問題をはらんでいた。解放はフランスの革命時の国民議會(Konvent)のClermont-Tonnerre(一七四七—一七九二)によつて出された原則に従つて承認された。つまり『Il faut tout refuser aux Juifs comme nation, il faut tout leur accorder comme individus』ユダヤ人の國家を承認はしないが、ユダヤ人個人にたいしては一切を認める—というものである。この基本原則はナポレオンによつて一般に通用するにいたり、その後ながく拘束力をもつていた。

一九世紀になると、西方のユダヤ人の間に自分の住んでいる國の中へ同化しようとする動きが強くなる。それは各國の同化政策、及びユダヤ人自身の社会的地位の向上、生活上の安定にもよろうが、ユダヤ人の内部的な変化も考慮しなければならぬ。つまり西方のユダヤ人はもはや小數派として色褪せたユダヤの規範の中に生きることを望まなくなつてきていたのである。同化はまた非ユダヤ人の間に生きてゆくうえで、より安全な道でもあつた。ユダヤ人の學者フェリックス・タイルハーバー(Felix Thelhaber)は一九一一年、その著『Der Untergang der deutschen Juden』の中で二〇世紀の末までにユダヤ人が自己解消してしまふことを期待している。そして事實タイルハーバーの期待通りに進んでいた。人口統計(ドイツの場合)でそれを見てみよう。

	ユダヤ人口	全人口比			
一八二〇	二七万	一・九%	一九一〇	六二万五千	〇・九五%
一八七一	五二万二千	一・二五%	一九二五	五六万四千	〇・九%

一九〇〇	五八万七千	一・一四%	一九三三	四九万九千	〇・七五%
------	-------	-------	------	-------	-------

(H. G. Adler: Die Juden in Deutschland S. 17)

ユダヤ人口が絶対数で増加した場合でも全体との関係を百分比でみると、やはり減少が目立っている。それは洗礼を受けてクリスチヤンに転向したり、結婚による同化や、子供が無いために家系が絶えたりした結果であり、その他にもアメリカなど国外へ移住したケースも考慮しなければならぬ。しかしいちはん大きいのはやはりユダヤ人の積極的な同化の意志であろう。だが一口に「同化」といってもこの言葉には実に様々な問題が内包されている。ここにカフカと同じ時代を生きた対照的な二人のユダヤ人がいる。ワルター・ラーテナウ（一八六七—一九二二）とアルフレッド・ケル（一八六七—一九四八）である。極端な言い方をすれば、ラーテナウにとってドイツ人は長身金髪の  $\checkmark$  Mutmensch  $\wedge$  であり、ユダヤ人とは精神的に混乱をきたした  $\checkmark$  Angstmensch  $\wedge$  を意味していたようである。（ラーテナウには  $\checkmark$  Zur Kritik der Zeit  $\wedge$  の中に  $\checkmark$  Staat und Judentum  $\wedge$  という一章があるが、この場合  $\checkmark$  Reflexionen  $\wedge$  Leipzig 1912 が参考になる。またシュテファン・ツヴァイクが  $\checkmark$  Die Welt von Gestern  $\wedge$  の  $\checkmark$  Uber Europa hinaus  $\wedge$  の中で文学者の眼でラーテナウの姿に「ユダヤ人の悲劇」をみるとも書いている。）ドイツ人の行為が彼にとつての基準であり、掟であった。ケルの場合はまったく異っている。彼もまたドイツ人の中に理想的な人間、全きドイツ人の存在することを充分承知しているが、彼らの前で頭を下げてしまうことはない。彼はラーテナウとは別の極端へと向う。つまり  $\checkmark$  Deutschland  $\wedge$  の中に完全に融けこんでいると信じている彼はドイツ民族の絶対確実な助言者、Praeceptor Germaniae として影響を与えんとする。この点は先輩ハイネに似ている。ケルは悪意などまったくくない人間であるが、デリケートな心理的洞察には欠けていたようである。こうしたアクティヴな同化の道とラーテナウのパッシヴな同化の道は二つの根本要因となつて多くのヴァリエーションを生む。（そのほかにもカフカの親友マックス・ブロートが第三の可能性を主張している。その中心概念をブロートは  $\checkmark$  Distanzliebe  $\wedge$  と名づけている。存在の仕方としてどちらが良いか悪いかということではなくて、全然別な存在の仕方がここでは問題になつている。距離をおく努力をすることによって、自己の属する民族にたいする過度の親愛の情をおさえ、ドイツ、ユダヤ両民族の間に橋をわたそうとするもので、弁証法的な概念であるといえる。 $\checkmark$  Distanz  $\wedge$  のあ

るところ「愛」はないと言われるかも知れぬ。しかし√Distanzliebeへもやはり「愛」にはちがいない。自己を止揚し、自己を克服する努力から結局においては二つの人間集団の間に存在する疎隔をできるだけ縮めようとする考え方である。→Der Praeger Kreisの31理論としては面白いが、実際的ではなかったようである。)

ところで、このあたりでユダヤ人問題が宗教的問題としてとらえられていた時代から少しづつ変質してきている点を注意しておく必要があろう。このことに関して S. M. Dubnow は、「ユダヤ人問題は完全な解放が始って以来、私にとっては宗教的、人種の問題ではなく、また法律上の問題でもなく、社会的、倫理的問題である」と書じている。(→Die neueste Geschichte des jüdischen Volkes Ⅲ, 1920 S. 9) 確かに今日のユダヤ人排斥運動(Antisemitismus)は中世の宗教的なユダヤ人迫害(Judenhaß)と混同されてはならない。例えば、A. Stöcker は一八八〇年「Das moderne Judenthum」の中で「イスラエル人は異質な民族で彼らがキリスト教徒に改宗しても我われと一つになることはできない」と述べている。またリヒャルト・ヴァーグナーは一八八一年「私はユダヤ人種を純粹な人間性とその中に存在する高貴なるものの生れながらの敵であると思う。ドイツ人はユダヤ人のために破滅させられるであろう」と述べたという。(E. G. Reichmann: Flucht in den Haß, 1966 S. 19)これはもはや宗教問題ではまったくなく、ユダヤ人が迫害の中で後天的に身につけた性格にたいする偏見である。

また歴史家トライチユケは一八七九年、彼の主宰する「Preussische Jahrbücher」の中で二つの論文を発表する。彼はユダヤ人排斥運動のあまりの汚らしさと野蠻さのゆえに、この運動から遠ざかっていたが、彼の理論は結果的にユダヤ人迫害の焰に油を注ぐことになる。彼はユダヤ人排斥運動の中にドイツ人の深い、しかも永い間抑えられていた怒りの爆発をみており、それは理由のない怒りではなくて、√freundへなエレメントに対するゲルマン民族の国民感情の自然な反応であると考へる。彼は歴史の古いゲルマン文化の後にドイツユダヤ混淆文化の時代のことを恐れている。「今日では「Die Juden sind unser Unglück」という声も聞かれる」と彼は言う。トライチユケの本意は排斥運動にあるのではない。ユダヤ人が文化的にも完全にドイツ人の中に同化することを望んでいる。そしてそれが不可能ならばドイツ人の信仰、風習、感情を尊重してもらいたい。もしそれのできないのなら方法は一つ、移住して

ユダヤ人国家を建設することである。ドイツ国内には二つの国籍を認めておく場はない」というのが彼の考え方である。彼はユダヤ人の解放を取消したり、制限するなどの方法は逆効果であることを識っている。トライチユケの場合は文化的反ユダヤ主義といつてよ  
いだろう。

西欧諸国のうちには自国のユダヤ人問題解決のために、非開発国をユダヤ人の手によって植民地化しようとする国もあったが、大部分のユダヤ人にとっては結局同化か、ユダヤ国家建設のいづれかの道しか残されていなかった。前述のプロートのいう「Distance-  
る」は複雑なユダヤ人問題のなかで現実的な手段ではなかったのである。トライチユケから六年後、オーストリアのユダヤ人 Popper-  
Lynkeus は書いている。「反セミ主義者は根っからの敵で、彼らの考えを顧慮する必要はない。彼らが結ぶ絆はむき出しの憎しみである。反セミ主義者の居るところではユダヤ人は連帯しなければならない……これは悲しいことだが不可避である。」(『Führer Bismarck  
und der Antisemitismus』, 1925 S. 132 u. S. 138)

こうした言葉の背景には一九世紀後半における近代ナショナリズムがある。そしてたちまちその愛国的義務感はトライチユケにみ  
られた文化的反ユダヤ主義を民族主義的反ユダヤ主義に変質させてしまった。

## (2)

カフカの生きた世紀転換期のブラハについてはヴァーゲンバッハ、ハインツ・ポリツァー、マックス・プロート、ウイリー・ハース  
などが詳述しているので中広い社会的、文化的な側面は省略して、ここでは専らユダヤ人の問題に限って話を進めたい。

当時のブラハが三重のゲットーに囲まれていたというパウル・アイスナーの説はプロートの批判(『Der Prager Kreis』 S. 37) があると  
しても一応問題はないと思われる。アイスナーはドイツ人、ユダヤ人、そしてブラハの人口の大部分を占めるチェコ人による三重のゲ  
ットーに囲まれたブラハの閉鎖性を問題にしているが、ふりかえってみるとブラハにおけるユダヤ人の歴史は古い。三二一年、ケルン

に登場したユダヤ人は八〇〇年から九〇〇年にかけてペーメンにまで達する。そしてたちまちプラハ、更にザーレ、エルベ河畔にユダヤ人の共同体ができあがる。だがその幸福な生活は永續きしない。プラハのユダヤ人もやがてドイツ人、チェコ人の間で圧迫されて生きることになる。世紀転換期のプラハの人種問題は政治問題をこえて社会問題となっていた。この苛酷な状況は人口比率をみただけで容易に納得がゆくはずである。当時プラハでは一〇年毎に国勢調査が行われているのでその数を紹介すると、一八八〇年プラハには郊外も含めて、チェコ語を日常語とするものが二二八、〇〇〇名、ドイツ語を日常語とするもの四二、〇〇〇名がいたが、一〇年後にはチェコ語人口三〇三、〇〇〇名と一〇年前に比べて七五、〇〇〇名増加しているのたいていして、ドイツ語人口は四一、〇〇〇名と約一、〇〇〇名の減少を示している。更に一〇年して、つまり一九〇〇年には四一五、〇〇〇名のチェコ人、ドイツ人一〇、〇〇〇名、ユダヤ人二五、〇〇〇名、うち一四、〇〇〇名はチェコ語、一一、〇〇〇名がドイツ語を日常語とする。(Hans Tramer: Prague—City of Three Peoples)

この僅かなドイツ人は例外なく大ブルジョワで、ドイツ人のプロレタリアなどはまず存在しなかった。ドイツ人貴族とドイツ人大ブルジョワ、そして社会的により低い地位に追いやられていたチェコ人との対立はそれだけでも充分に激しいものであった。ところがドイツ人社会は減少してゆくドイツ語人口に大きな不安とあせりを感じながらもドナウ君主国の歴史と威厳にかけて、その争いを凍結させようという強い意志をもっていた。

プラハのドイツ人の立場が人口減少という理由から危険にさらされ、不安定になっていったとすれば、それ以上に危険かつ不安定であったのが、その僅か二一、〇〇〇名というドイツ語人口の約半数を占めるリベラルなユダヤ人の立場であった。チェコ人からはドイツ人として憎しみの対象とされ、ドイツ人からはユダヤ人として蔑視され、拒否されたのである。カフカはヤノーホとの対話の中で「ユダヤ人とドイツ人には多くの共通点があります。彼らは努力家で働き者で、他の民族に徹底的にきらわれています。ユダヤ人もドイツ人も排斥された存在です」、『カフカとの対話』吉田仙太郎訳 一六五頁と述べている。なるほどこの時代に先立って各国でユダヤ人の平等権が認められている。比較的遅かったオーストリア・ハンガリー帝国でも一八六七年には平等権が法律的に定められている。

しかしなかなかユダヤ人の願う方向へは進まない。ドイツでは一八八一年、宰相ビスマルクのもとに「反ユダヤ主義請願書」が提出される。これはワイマール共和国成立以前の最もラジカルなユダヤ人排斥運動であった。この請願書はほぼ一年にわたって準備された。一八八一年四月、それまでこの問題に沈黙していたビスマルクに手渡されたときには二六七、〇〇〇名の署名を集めていた。彼等はユダヤ人の人口制限や国家の要職からの締め出しなどを要求していた。この文書と共に大量に送付された添書にはビスマルクも政府もこの国民の願いに賛意を示しているという主張がなされていた。これには鋭い反駁が加えられ、自由主義思想家ルドルフ・フィルヒョ (Rudolf Virchow) は政府が反セミ主義者と連帯していると批判した。自由主義者の指導者オイゲン・リヒター (Eugen Richter) は記憶すべき言葉を述べている。「私は宰相がこの問題に関係していることを知っている。……このことを明らかにするため、我われの請願書を提出した。なぜなら、我われは我が国に恥辱を与えんとする反動派の抑圧をのぞんでいるからである。無規律な大衆の中に野蛮な情熱が起らないように注意していただきたい。人間の中の獣性を眼ざめさせるようなことはしないでほしい。」(Dubnow: Die neueste Geschichte des jüdischen Volkes, III S. 21 ff) このようなドイツの状況はそのままヨーロッパの状況であった。事実ヨーロッパ各地で発生するポグローム (ユダヤ人虐殺) のために多数のユダヤ人が虐殺され、略奪されたりしていた。カフカの父、ヘルマン・カフカがブラハに店を出した頃はまだポグロームが盛んであった。カフカの少年時代は町でチェコ人学童と出会うと、きつと殴り合いの喧嘩になった。カフカの友人オスカー・ポラクが視力を失ったのもこんな殴り合いの結果であった。チェコ人とドイツ人、この二つの民族の間に挟まれたブラハのユダヤ人の立場は宿命的で影響の及ぶところ大であった。彼らはみずからの意志で島のような閉鎖性の中に暮した。アイズナーはこれを「宗教的ゲッターから社会的ゲッターへの移住」という言葉で表現している。

そんなときユダヤ人にとってショックな事件がフランスに起った。ドレーフェス事件 (一八九四年) である。

これはテオドル・ヘルツル (Theodor Herzl) のシオニズム運動のきっかけをつくった事件であり、カフカも後にこの運動に関係することになるので触れておきたい。

事件当時ウィーンの「新自由新聞」(Neue Freie Presse) の編集にあたっていたヘルツルは特派員としてパリでこの事件の取材にあ

たる。約一〇年後、これがドレーフェス大尉の同僚の仕組んだテッチ上げ事件であったことが判明して、ドレーフェスは無罪となる。しかしヘルツルはドレーフェスがただユダヤ人であるという理由だけでこの恐ろしいスパイの嫌疑を身にこうむったことを知る。人権宣言を経て一〇〇年後の、一般的には進歩した高度の文化を誇ると思われていたフランスでこのような事件が起こるようでは他の国民からは何を期待し得よう。ヘルツルはリベラルなユダヤ人市民の同化の理念までもが無残にうちくだされたことを認識し、一八九六年、小冊子「ユダヤ国家」(『Juden Staat』)を公にする。その中でヘルツルは、「平等と完全な寛容を求めるあらゆる希望はユダヤ民族にとっては不可能である……ユダヤ人の故郷パレスチナに新しい自分たちの故郷を創設しなければならぬ」と宣言する。(『Theodor Herzl, edited by Ludwig Lewisohn: 『The Israel-Arab Reader』, Pelican Book) ところがウィーンを中心とするユダヤ人市民は驚きと怒りをもってこれをむかえた。世期末のオーストリアにあつてブルジョワや貴族の間にこれほど有名で人気のある作家もめずらしい。しかし今やその人気は突如として反感に変わってしまう。「ユダヤ人は『Ringstrasse』の家々から、商店から、弁護士事務所から袋や小包をもってパレスチナに移住し、そこに新国家を建設すべし」というヘルツルの主張は多くのユダヤ人にとって正気の沙汰とは思えなかった。この時以来ヘルツルがどれほど世間のユダヤ人から冷たい視線を浴びたかはシュテファン・ツヴァイクのヘルツルの思い出の中に詳しく。(『Begegnungen mit Menschen, Büchern, Städten』) しかしヘルツルを最も苦しめたのは同じくユダヤ人であるカール・クラウスの『シオンの王冠』(『Eine Krone für Zion』)による反論であった。この『Krone』にはシオニスト会議の投票権を得るためのお金(Krone)という意味とシオニズム運動をユートピア的な王国建設の夢と極めつけて、この王国の王冠(Krone)という二重の意味が皮肉にもこめられていた。クラウスはユダヤ人であるが反ユダヤ主義者であった。彼はユダヤ系新聞の無批判な団結心や、ドレーフェス事件を何ら吟味もせずにドレーフェスの無罪を信ずる態度をきらった。後にクラウスはヘルツルに対する態度を改めるが、当時のクラウスの攻撃の棘は生涯ヘルツルの心に突きささっていたという。クラウスも生理学的な血の交わり(Blutmischung)のない同化は充分な意味をもたないことは認識していたが、クラウスはこの認識から逆の結論を出したのである。つまり『Judentum』から完全に離れてしまうことが、解決に結びつくと考えたのである。西欧で教育をうけた所謂西方ユダヤ人には完全にドイツ人化して

いる場合が少なくない。ときには好戦的な *Deutschum* をすら熱心に支持するユダヤ人もいたほどである。従って、ユダヤ教の掟や習慣をかたく守ろうとする東方ユダヤ人との間には対立感情も存在した。「同化」や「シオニズム」をめぐるユダヤ人の間に様々な意見の相違のあったことは納得されよう。

ヘルツルはユダヤ人の運命が堪えがたかったロシアやルーマニアなどで賛同を得たにとどまり、彼の住むウィーンでは首席 Rabbi (ユダヤの法律、宗教学者、以下「ラビ」とする) であるギューデマン (Güdemann) が反ヘルツルの態度表明をした。「ハレスチナにユダヤ人国家を建設するというシオニストの主張は聖書その他の宗教文書の中に含まれているメシアの契約に矛盾撞着するものである」というのがラビたちの考え方であった。(Dahnov. II, S. 32)

シオニズム運動はまだ公権を剝奪されている東方のユダヤ人のために、安全な故郷を建設するという限りでは歓迎されるべきであった。しかし *Wirtsvoik* (外来民族に対するその国の主民族) の国民感情を否定し、みづからをユダヤ人として、*Gastvoik* (外来民族) として意識しながら、彼等だけの歴史や宗教を誇るのでは両者は永遠に水と油である。

一口にシオニストと呼んでも実は様々なニュアンスがあり、大きくは同化に反対する急進派 *Radikale* と修正主義者 *Revisionisten* といわれる人たちに分けられる。修正主義者とはばれる人たちの中には、例えばドイツの国民経済学者フランツ・オッペンハイマー (Franz Oppenheimer) のように同化主義者ではないが実際には同化してしまっているというケースが多い。オッペンハイマーはカントやゲテの国に生れたことを幸福に思っている。ドイツで教育をうけ、ドイツ語を話し、ドイツの文化、芸術、学問、哲学が彼の中に吸収されている。ドイツの国民感情とユダヤ人の国民感情が彼の中では一つに結びついているが、彼もまたシオニストであった。シオニズム運動は多くの反対や非難を浴びながらも、比較的若い人たちの間で受け入れられ、ヘルツルの満身創痍の努力によって、初めて実地的な政治運動となる。それはカフカがギムナージウムに存学中のことである。カフカはこの運動にたいして、また *Judentum* そのものについていかなる態度をとったであろうか。

ギムナージウム時代のカフカは社会主義やダーウィンの進化論などに強い興味を示す。従ってこの当時の無神論者カフカと『Judentum』との間には何らの関係もみられない。勿論シオニズムとも無縁であった。その後も関心は専ら無政府主義運動などに向けられており、第一次大戦前のカフカはチェコのアナーキストの集会にも参加している。クロポトキン、ペトル・ベズルーチ『シュレジアの歌』の著者)などを読んでおり、一九一八年の八つ折り版ノートには「無産労働者階級」『Bestizlose Arbeiterschaft』という構想もみられる。カフカもブラハの他の作家と同じような問題意識をもって闘わねばならなかったが、カフカには新ロマン主義、あるいは宗教その他、似たような逃避の試みはできなかった。カフカと同じ社会的状況の下で、労働者階級への接近がインテリのいづく人生問題の解決に道をひらくことになりはしないか、という考えを作品の中で発表した人はいなかった。そうした作家の見当らなかつた一九一二年頃、すでに『火夫』『Der Heiser』の中でカフカはその歩みをしていった。

そして記録の上でみるカフカの『Judentum』との最初の出会いは一九一〇年五月ブラハのサヴォイ・ホールでイーディッシュ言語による芝居を見たときであった。カフカ二七才のときであるが、これは彼が日記を書きはじめた年にあたる。そこでまず日記を手はじめに、書簡集、ヤノーホとの対話、ミレーナへの手紙などをみてゆきたい。

日記におけるユダヤ人についての記述は一九一一年から一九一二年にかけて集中している。その後は作品の構想や個人的悩みなどの訴えが多くなり、一九二〇年頃になって再びユダヤ人についての観察が次第に深刻さを加えて登場してくる。カフカを『Judentum』に近づけたのは当時この問題に頭をつっこみはじめていたカフカの友マックス・プロートであった。カフカは『父への手紙』の中で、父親の形骸化したユダヤ教信仰を責めているが、同時に「空虚なユダヤ教」という言い方をしながら、自分自身にも信仰心がまったく欠けていることを告白している。この宗教的無関心はカフカ家に限らず、当時のブラハの解放されたユダヤ人一般に共通するものであった。だからこそ堅信礼の儀式は「滑稽な暗誦練習」にすぎず、礼拝堂での教時間は無限に退屈であった。ウイリー・ハースは『文学的回想』(原田義人訳)の中で「当時私達の心を動かしたものは神の問題ではなかった」(二〇頁)、と書いているがそれにはひとつ大きな理由があった。つまりウイリー・ハース、フランツ・ヴェルフェル、フランツ・カフカ等の父親はいずれも田舎や地方の出身者であ

り、彼らの家庭はいはば核家族であり祖先から伝えられる宗教的伝統をもたなかった。その点をハースは次のように書いている。「古いブラハのユダヤ人墓地は、世界で最も美しく、もっとも神秘的な墓地であるが、そこには偉大なラビたちとその妻たちの墓碑が立ち、花咲く灌木林、野の花と草との茂みのあいだ、緑の木々と灰色の壁とのあいだに、倒れかかった石碑がある。その墓地は私たちの墓地ではなかった。」(前掲書四九頁)

彼らは祖先と完全に切り離されて生きており、いわば神話について涸渇してしまっていた。日記や対話にみられるカフカの宗教的関心は専ら同胞にたいする共感の念から出発している。それは「弱虫のユダヤ人の役を演じたくないばかりに、もっともひどい学童同士の喧嘩の渦の中へとび込んでいった」(ヤノーホ『カフカとの対話』)少年カフカの同胞意識を一步も出るものではなかった。その頃教会堂の中で三人の敬虔な東方系と思われるユダヤ人に出会ったカフカは「これまでと比較にならぬほど強くユダヤ教に惹かれている。」(『日記』一九一一・一〇・一) 其後のカフカは東欧系のユダヤ人劇団に接近し、足繁く芝居を見に通う。俳優レーヴィと親しく交わり、彼を通じて少しづつ東欧のユダヤ人の宗教生活についての知識を得る。彼らの敬虔な宗教生活に感動したカフカは次第にユダヤ教に心惹かれてゆく。十一月一日の日記には「グレーツ(Graetz)の『ユダヤ教史』(『Volkstümliche Geschichte der Juden I-III, 1928』)を貪る様に楽しく読み出した」と記されている。タルムートについて語り合うカシディーム(ラビの法律には束縛されない)の会に出席したり、更には「ユダヤ人の家庭生活の欠陥は妻がタルムート研究から除外されていることだ」とすら述べており、東欧のユダヤ人の宗教生活に強い共感をいだいている。しかし一方で多くの疑問を提出している。一九二二年、シオニストの会に出席するが感激はない。(『日記』)殊に甥の割礼の式に出席したカフカが西欧的ユダヤ教が過渡期にきたことを感じているのにたいして、「割礼にたづさわ当事者たちの間にユダヤ教の将来についての心配が全然みうけられない」といっているあたりは、概して教育程度のひくい東欧系ユダヤ人と、西欧の教育を受けたユダヤ人カフカとのへだたりを感じさせて悲劇的ですらある。其後もマックス・プロートその他の友人とラビのもとへ出掛けては行くが西欧ユダヤ人を自認していたカフカは一般の東欧ユダヤ人の当然のごときユダヤ的宗教生活、服装などには違和感をいだいている。ここにはすでにユダヤ教の根は絶ち切られてしまっているが、かと言ってキリスト教とも無縁である

という西欧ユダヤ人の姿がみられる。

一九一四年八月二日の日記には、ドイツがロシアに宣戦布告したという記述がある。この頃になると、駅頭にみかけるユダヤ人難民の家族などについての描写が登場する。カフカは母親や子供達の姿を一言の感想も加えずに書き記している。しかしそれだけにかえってそれを読む読者にはカフカの同胞にたいする *Vertrauen* が強く伝ってくる。そしてその頃カフカのシオニズム運動への接近がみられる。一九一四年までのカフカはシオニズムの綱領主義的な態度を嫌っていたようである。一時的なプロットとの不和もこんなことが原因になっていた。しかし一方でこの運動のもつパレスチナに移住して新しいユダヤ人の国づくりをする、という所謂シャルズ運動 (*Chalutz-Bewegung*) には強い関心を示す。一九一六年には婚約者フェリーツェ・パウアーをシオニズム運動の実践活動に参加させている。

ところでハンディズム (*Chassidismus*) との結びつきもこの頃に生ずる。しかしこの時も宗教心とは無縁であった。プロットに連れられてハンディム派の秘教師 (*Wunderabth*) の集まりに出席したカフカは帰途、「酷評すればアフリカの蛮族のやることだ。まったくの迷信だ、」(プロット『カフカ』)と述べている。フェリーツェ宛の書簡集を読むと、「ハンディズム」の研究家マルティン・ブーバーの名が四度出てくるが、ブーバーを生き生きとした飾らない卓越した人物であると言いながら、書くものは *Lautwarn* であると述べている。(一九一三、一、一九) フェリーツェにたいしてブーバーのカフカ宛の手紙を読む気があれば送ると書いている(一九一六、一〇・六)、が三週間後には「ブーバーの手紙には注目すべきことは何も無い。なぜ手紙を送ると言ったりしたのか」(一九一六、一〇・三〇)、という反省の言葉もみられる。ハンディズムは十八世紀にポーランドに起ったが、もともとタルムト的律法主義、形式主義にたいして情感的宗教経験を強く主張するのがその特徴である。カフカには本来、宗教にたいする厳格な態度がないので、律法主義もハンディズムもまったく区別する気はないらしく、両方の会合に何ら差別せずに等しく出席している。宗教的無関心と同時にカフカのような西欧的教養人には同じユダヤ教の内部の問題で対立し合うのはつまらないことだという気持が働いたのだろうと察せられる。ハンディズムとの結びつきはその後も続き、例えば一九二二年の五月、六月の日記にはそれぞれ *Maggid* とか *Flicker* -

beit (つぎはぎ細工) という単語がメモでもするように書き残されている。V Maggid はその年 (一九二二年) に出たマルティン・ブーバーの譬え話を集めた ≪ Großer Maggid und seine Nachfolge ≫ に出てくるラビの名であるがこの名は ≪ Die Erzählungen der Classidim ≫ の中に度々登場する。V Flickarbeit はハシディズム的に解釈して「敬虔なる者」という意味を連想させる単語である (H. Poltzer: Franz Kafka Der Künstler S. 40) ハシディズムを批判しながら、ハシディズム物語を「我が家にいるような気持」で読んでいたというところにも宗教には無縁だが、ユダヤ民族の文化的伝統や同胞には強い関心を示すカフカの内面がのぞいてゐる。

さて一九二〇年、つまりカフカの死の四年前からミレーナやヤノホとの交友が始まっている。この頃になるとカフカのユダヤ人問題にたいする態度は切実さを加える。ユダヤ人としての同胞意識が強まったうらには当時のブラハのユダヤ人の状況が苛酷さを加えていたという事情がある。まず、その底流となっている政治、社会状況などに注目したい。

一九〇〇年を前後としてチェコ地方は経済の領域で大きな進歩をとげた。この地方はオーストリアハンガリー帝国の主要工業地帯となっていた。冶金工業、機械工業がブラハ郊外を埋めた。自動車工業、武器製造工場の基礎はこの頃つくられた。資本ははじめウィーンを中心とするドイツ人のものであったが、後にはドイツ帝国の資本も入ってくる。それは当初から帝国主義的な色彩の強いものであった。一方でチェコ人の人口は急激に増加し、農村人口も続々と都市に流れ込んだ。労働運動は活発化し、ストライキには軍隊が出動するほどであった。こうした社会状況はいづれもユダヤ人にとって脅威である。住民の不満はつねに弱小民族にたいしてはけ口を求めるところである。

一九一八年にはオーストリアハンガリー二重帝国の解体は急速に進み、これまで資本主義のもとで弱体化していたハプスブルク王国は崩壊してしまう。このことは多くの人に政治参加のチャンスを与えた。カフカの友人の作家の中からも政治に参加するものがあらわれた。キッシュ (Egon Erwin Kisch) は一九一八年一月、ウィーンの「赤い親衛隊」(Rote Garde) の先頭に立っていたし、フランツ・ヴェルフェルもキッシュに共鳴し熱烈に応援していた。マックス・プロートはユダヤ立法議会 (Jüdischer Nationalrat) の設

立のために働いており、その後しばらく副議長をしていた。一九二〇年四月にはマサリク (Tomás Masaryk) の指導するチェコスロバキア第一共和国において第一回総選挙が行われ、プロートもチェコ・シオニズム党から立候補している。しかし複雑な人種構成や世界観の違いは人々の力を結集することができず、人種的にはそれぞれ個別化を進める結果になった。「無産労働者階級」なる構想もち、社会主義運動に強い関心をいだいていたカフカにはこの時を境として意識の変化がみられる。カフカにとって社会主義運動の前途もばら色ではなかった。

ブラハのドイツ文学の特徴は作家たちが市民的リベラリズムの時代が終焉に近づいていることを予感している点にある。リベラリズムの去った世界、その後にくる世界は——永い間迫害に苦しんできたユダヤ人は暗い予感に包まれていた。彼らの運命はリベラリズムの運命と密接に結びついていた。リルケ (一八七五—一九二六) からヴァイスコップ (一九〇〇—一九五五) にいたる僅か二五年間にブラハはフランツ・カフカ、オスカー・バウム、マックス・プロート、エルンスト・バイス、レオ・ペルッツ、ルドルフ・フクス、フランツ・ヴェルフェル、ヘルマン・ウンガル、ペーター・バイス、ヨハネス・ウルツイデルなどの作家を輩出している。一九〇〇年頃、ブラハの人口五〇〇、〇〇〇弱のうちドイツ語人口約三〇、〇〇〇である。右に挙げた作家がすべてユダヤ系であることを考えあわせると当時のブラハの文学世界の濃密さと同時にブラハのドイツ文学の特殊性が明らかになってくる筈である。彼らはいずれもパニックの不安の中で市民的リベラリズムという沈没せんとする船を見棄てて、別な方法でヒューマニスティックな遺産を未来へ向けて救おうとしたのである。なぜかくも多くのユダヤ人がブラハのドイツ文学にアクティヴに参加したかが理解できよう。それは歴史的必然であった。

さて圧倒的多数派のチェコ人の中で少数派のユダヤ人の生活は次第に厳しさを加える。カフカはミレーナに宛てて書いている。「今日の午後はずっと街中で冷たい視線を浴びながら過しました。ユダヤ人は ≪*Prasivé plemeno*≫ (疥癬病みの人種) と呼ばれています。シオニズムの感情がなくてもこの町から立ち去って行こうと思うのは当然じゃないでしょうか。」(p. 20) あるいはまたすぐ後の個所で、騎馬巡查や憲兵隊の姿を思い出しながら、「絶えず彼らの庇護のもとに生きてゆかねばならぬ恥辱を骨身に徹して感じてい

る」とも述べている。そしてついには、「こうした中に踏みとどまって生きて行こうという英雄意識は浴室の中で根絶されないうギブリの英雄意識である」(S. 206)、と書いている。ヤノーホは晩年のカフカには「タルムディストのもつ偏執的な激しさが加わっていた」(『カフカとの対話』二二七頁)、と証言している。

こうしたカフカの態度をただちにユダヤ教への接近としてとらえることは間違っている。前述したように、カフカの幼年時代の家庭には形骸化したユダヤ教信仰しかないし、少年時代、青年時代に受けた西欧的な教育の中でカフカは宗教的関心を全く示さない。これはカフカに限ったことではなく、カフカの友人たち、マックス・ブロート、フランツ・ヴェルフェル、ウィリー・ハース、フェリツクスヴェルチュエそしてマルティン・ブーバーですら大学時代まで *Judentum* へよりもむしろ西欧文化の撰取に熱中していたのである。カフカのシオニズムへの接近にはかなり複雑な屈折がみられる。「シオニズムを唯一の正しい道と確信しているか」というヤノーホの問に対してカフカは困惑しながら、「道が正しいか正しくないかはつねに目標に達してはじめて分るものです。いずれにしろ私たちは、今は進むのです……」と答えている。あるいはまた「世界の進歩的な労働運動は反ユダヤ主義がこれ以上増大することをゆるさないだろうと思います、」というヤノーホの言葉にカフカは愁わしげに頭を垂れる。「あなたの思い違いです。反ユダヤ主義は労働者階級にまで手を伸ばさだろうと思うのです。それは労働者傷害保険局においてみられるのです。傷害保険局は労働運動の成果です……その中で私は唯一のユダヤ人という見世物を勤めているのです。」(『カフカとの対話』二六〇頁) これをカフカの悲観論とばかり言い棄てることはできない。ヤノーホの『カフカとの対話』の中には更に次のようなエピソードがある。

「カフカはこの傷害保険局で、仕事中左脚を砕かれた一人の補助工のために、年金を貰えるようにその願書を専門家の立場から補足し、この男の正当な要求を勝訴に導いてやったことがある。弁護士に依頼し、助言し、支払いをしたのが——あとで分ったことだが——カフカであった。彼は傷害保険局の法律代理人として、老いたる補助工との訴訟に名譽ある敗北をとげたのであった。しかし役人の間ではいろいろと話題になり、賞讃するものもあれば、無能な法律家だというものもある。」(『カフカとの対話』九五頁) この話を息子に語ったヤノーホの父は「人間愛はしばしば危機を孕むものだ……ドクトル・カフカはユダヤ人だが、それでいて彼はうちの役所の

善良で愛すべきカトリックやプロテスタントの諸君よりも、はるかにキリスト教の隣人愛を行なうことができる。彼らはそのことを遅かれ早かれ恥じねばならぬだろう。そうするとなにか卑劣なことが始まりかねない(筆者傍点)と述べている。(九六頁) 我われはドレーフス事件を思い出さずにはいられない。ユダヤ人が優秀であったり、人間愛を行なったりすることが逆にみづからの落し穴を掘ることになろうとは——カフカはすでにこれを承知していた。シオニズムはカフカにとって止むを得ず選んだ道であった、と言えよう。彼はユダヤ民族の一員としての意識、共感だけは少年時代から日常生活を通じてはつきりもっていた。タルムート研究やラビとの交際の中にもそれがそのままあらわれていて、宗教心はないが、祖先が残した文化的遺産に触れたいという感情は強かった。カフカがタルムート研究を楽しんでいたことは日記の中に記されている。しかしその教えを頑固に守ろうとするようなファンナティックな態度は勿論ない。西欧インテリのエリートとして東欧の概して教育程度のひくいしばればファンナティックなユダヤ教徒にたいしてカフカは共感と同時に困惑の態度を示している。ユダヤ人教会が周囲の現代風の家並のなかで異物として混れ込んでいる光景はカフカにとってすべてのユダヤ的なものの象徴として映った。√Wirtzvolkへに融けこまずに自己主張する態度に危惧の念をいだいていた。そしてそれがユダヤ人に対する挑発行為にまで昂まる敵対感情の根源であるとカフカには思えたのである。共同体への郷愁をいだきつづけながら、その共同体から遮断されている、という内的不安がカフカのシオニズムに対する関係の特徴づけている。その特徴は一九一二年にすでに確認されているが、彼の関心はつねに新しいユダヤ人のパレスチナ移住運動(Chaluz-Bewegung)にのみむけられていた。先にカフカとシオニズムとの結びつきは一九一四年であると述べた。しかしパレスチナ移住には比較的はやくから関心をもっていたようである。一九一二年五月二三日の日記には「最近ダビット・トリリーチュによるパレスチナ移民についてのすぐれた講演があった」と書かれている。そして晩年にもこの関心は更に強いかたちで存在する。挫折した最初のロシア革命の後、多くの若いロシア系ユダヤ人が社会主義理念をパレスチナにもたらし、最初の Kibbutzim(コルホーズ的性格をもった共産移住地)の中に実現させていた。しかし単にこのきびしい無私の社会主義ばかりでなく、移住者たちの素朴な努力もカフカを魅きつけていた。こうした限定された意味において、カフカはシオニズムに生き生きとした関心をよせていた。

一九二二年、おそろしいインフレの冬がはじまる。この冬がフランツを殺した、とプロートは書いているが、病状のすすんでいたカフカは体の具合の良いときだけ「ユダヤ教大学」に通ってタルムートやヘブライ語のテキストを読んだ。

カフカの死後、プロートに残された原稿とはほぼ同量のヘブライ語のノートが残されていた。死の前年、つまり一九二三年に知り合ったドーラ・ディマントはハシディム派の名門の出で東方ユダヤ人的な伝統を身に備えていて、カフカにヘブライ語を教えた。健康が回復したら、パレスチナへ移住し、料理の得意なドーラと小さなレストランを開き、自分自身はそこで給仕として働くというのがカフカの見果てぬ夢であった。

(3)

ユダヤ民族を理解することは極めてむずかしい。彼らは世界各地に散っており、自国 (Stammland) をもたなかったからである。彼らの適応能力は有名であるが、それは可変的ということであり、ある場合にはある国の言語や文明をそのまま他国に持込んで彼らの財産以上に根強くそれを守っていたりする。しかしゲッターの中で彼らの宗教的な生活習慣を守る際の頑固さは、また役らの適応能力以上に有名である。こうしたある時は柔軟な、またある時は頑固なユダヤ民族の性格が我われのユダヤ民族の理解を妨げている。カフカの作品の中に「Judentum」へをさぐるというところは容易な作業ではないが、以下『掟の門』≫「Vor dem Gesetz」を通じて問題点を指摘してみたい。

ワルター・ベンヤミンは親友ゲールハルト・ショーレム (Gerhard Scholem) に宛てた書簡の中でこの作品を「ドイツ語で書かれた作品のうちで最高の作品の一つであると思う」(『Briefe』I Suhrkamp, S. 397) と述べている。この作品はユダヤ系の批評家を刺激するところがあるらしく、他にもヴェルナー・クラフト (Werner Kraft) やハネス・ウルツィェイルなどが論評している。

ところでベンヤミンはこの Parabel, ≪Vor dem Gesetz≫ にこづいての論文 (『Franz Kafka』, 1934 邦訳有り) の中でカフカがこ

れと同じ内容の〈Gesetz〉(掟)の物語を『Prozeß』という小説の中に挿入していることに注目する。というのはカフカ自身が『Prozeß』の中で僧侶を通じてこの Parabel を解釈しようとしている個所があるからである。そしてベンヤミンは、『Prozeß』は『Vor dem Gesetz』の展開した形以外の何物でもないと推論する。しばしば言われることであるが、カフカの作品はそれ自体独立して受けとられるべき性質のものではなく、引用しながら、また解説しながら語ってゆける性質のものである。この点がカフカの作品のタルムートの討論形式として問題にされるところである。カフカの作品はまた西欧の散文形式の中へ完全にはくり入れられるものではなく、教義にたいする関係は〈Halacha〉(モーセの律法に含まれていない口伝の生活規則)にたいする〈Hagada〉(ハラカー以外の注釈の文書で、律法的な拘束力はない——倫理的、教化的内容)の関係とも言われる。(ベンヤミン 前掲書) ベンヤミンは主としてスタイルの面から 〈Judentum〉の存在を指摘したが、内容的にも注目すべき点がある。

この物語の中では〈Gesetz〉(掟)に到達せんとする田舎の男〈der Mann aus dem Lande〉のことが扱われている。思想的にはカフカの stich な生活の核となる作品であるし、創作の上ではカフカの詩的生活の核となる作品である。物語は〈Vor dem Gesetz steht ein Türhüter〉(掟の前には一人の番人が立っている)という文ではじまる。この〈Gesetz〉はここでは何か建物の意味をもって登場している、と言える。こうした表現はなにもカフカ独自のものではない。例えば、あるヘブライ語の学者(恐らく Caesarea のラビのアカデミーの一員であるが、はっきりしない)は聖書について、「聖書はたくさんの小部屋をもった家のようなもので、その小部屋の前には鍵がおいてあるのだが、その部屋にはこの鍵は合わない。部屋をあけるための鍵を発見するのは大変困難な作業である」と述べている。(W. Kraft: Franz Kafka S. 20) 部屋(建物)を掟の意味に使うことはよく行われることである。カフカもまた、交際したラビの話や聖書の中の話からこの物語のヒントを得たものと思われる。

ところでカフカの考える〈Gesetz〉(掟)とは人間の存在を規定するような掟、つまり moralisch な掟である、と言えるだろう。この掟を通じて人間は stich に、まさに人間として生きることができると考え方はカフカの法律学研究に由来するものであるが、勿論法律上の掟などをはるかに超えている。カフカの掟の家はユダヤの掟の尺度に従っている。それは〈Thora〉から、

つまりタルムートの教えや注解から成っている。タルムートは繰返し「道徳生活」についての掟を述べている。ただ注意しなければならぬのは、カフカはユダヤの掟をたんに彼にいちばん身近な基準として選んだのにすぎず、それはキリスト教の掟を基準としても差支えなかったわけである。カフカはユダヤ教にもアムビバレントな感情をいだいており、宗教的にはむしろ無神論者であった。掟の家の前で見張りをしている門番はユダヤの「Schammasch」(Synagogendiener)というより、むしろカトリックでいう鍵の権(教会の懲戒権)を委ねられた人物である。外見は作品の中に描かれているようにモンゴルの門番という感じである。

ところで物語の主人公はなぜ「der Mann aus dem Lande」(田舎からきた男)であったのか? ウルツィディルはタルムートの中の用語「ヘブライ語の「Am ha-Areẓ」(田舎者、無知な信徒の意がある)」という言葉がカフカの頭の中にあつたのだから、と推測する。(「Da steht Kafka & S. 32) 死の直前、消耗し、疲れ切つて、立っている力もなくなったこの男は話をするために門番に合図して身をかがめてもらうが、その時の門番は不機嫌である。彼の使命は門を守るためではなかった。門番は道徳的に価値ある人間ならこの「掟」の中へ入って行くことを妨げることはなかったはずなのである。この無知な男はその点に気づかなかつた。男の死期がせまっているのを見てとつた番人はうすれ行く彼の聴覚にも聞こえるように咆えるような声でどなる。「ほかの誰もここから入ることはできないのだぞ。なぜならこの入口はお前のための入口だつたのだ。さあ、行つて門をしめるとするか。」

タルムートは語っている。「人間は最後の審判の際に質問される」——「汝は智慧を追求したか?」と。(「The Wisdom of the Talmud」 by Rabbi Pen Zion Bokser p. 92)

ヴェルナー・クラフトはまたこの作品の中で行われる主人公と番人との間の対話にタルムード的討論形式をみている。即ち言葉と答、質問と教訓、疑問と確信、その無限の循環運動のあることを指摘する。しかしクラフトもまたベンヤミンやウルツィディルと同様にここで強調されている掟をユダヤ教の掟であると解釈しようとする、直喩の真実の傍を通りすぎて空漠の中へ踏み迷うことになると警告する。(「Franz Kafka」 S. 72) カフカが晩年、シオニズムを通じて「Judentum」に接近したことや、ヘブライ語を学び、日記や手紙の中でユダヤ人であることの絶望性を悲しみやフェールをこめて告白したことは勿論事実である。しかしこの

発言に決定的な価値をおくことは許されまいだろう。「キルケゴールのようにキリスト教の重い手によって生に導き入れられることもなく、ユダヤ教の祈禱マントのすそをシオニストのようにつかまっていたのでもない」(八折判第四ノート) カフカは最後までキリスト教とか、ユダヤ教というような意味での宗教性とは無縁であった。

本稿は四六年五月八日「日本独文学会」での口頭発表「ユダヤ人としてのカフカ」に加筆したものである。(1)は今回新たに書き加えた。カフカと直接的には関係がないのだが、今後ユダヤ民族の流浪の生活(Wanderschaft)や、伝統とのつながりを欠いた西方ユダヤ人の境涯などを作品を通じてみてゆく場合、どうしても必要となってくるので、敢えて加えることにした。内容との関係で表題も改めた。なお発表に際してタルムートその他について「日本ユダヤ教団」のラビ、マーヴィン・トケイヤー氏から貴重な助言をいただいた。ここに付記して厚くお礼申し上げる。